香取遺産

◀墨書土器「大力」

vol.181 大戸白幡遺跡

大戸白幡遺跡は、佐原地域大戸字白幡に所在する集落遺跡です。また、10基以上の古墳が確認されており、白幡古墳群としても古くから知られています。

昨年、この遺跡内で側溝設置工事が行われましたが、その際に出土した墨書土器を紹介します。幅1mに満たない細長い土木工事のため、全容を明らかにするには至りませんでしたが、直径1・8m前後と思われる遺構の一部が確認され、この遺構の底からは平安時代の土師器坏が、複数重ねて置かれた状態でみつかりました。その内の2点に「大力」と墨書したものがあります。遺構に堆積した土を観察すると、一度に埋め戻しており、祭祀や儀式に関係するものと考えられます。墨書のある坏は縁の直径が12cmほどで、両手の掌に納まる大きさです。1点は内側に細い筆跡、もう1点は外側に太く力強い筆跡で書かれています。

当時の読み方は正確には分かりませんが、現地で「大力」の文字を発見した時は、「タヂカラ」の読みが瞬時に浮かびました。「手力男命」を祭神とする大戸神社の社伝に、最初は大戸字白幡周辺に鎮座し、孝徳天皇元(654)年に現在地に遷座とあるのです。社伝の遷座の年代と墨書土器とでは土器の方が少なくとも100年ほど新しいのですが、当遺跡が神社の故地であることと関係する遺物とも考えられます。しかし、この他に別字で「タヂカラ」と読めそうな墨書土器や神社との関連を示唆する遺物はなく、現時点で可否を決定することはできません。幸い遺跡のほとんどは、今も地中に保存されているので、今後はこの点にも注意を向けながら調査に当たることができます。事前に得た情報を生かす良い事例になりそうです。

皆さんは、「大力」についてどんな仮説を立てますか。

問 生涯学習課 ☎(50)1224